



1986-6

No. 213

【表紙】

森の輪 II

(国立西洋美術館蔵)

解説は30ページ

題字デザイン・桑山弥三郎

カット・林美紀子

もくじ

特集：文化財の保存整備と活用

歴史の道の整備と活用	上原 茂	4
風土記の丘	文化財保護部記念物課	6
映像と民俗文化	姫田 忠義	8

エッセイ

タイムトンネル下関	星野哲郎	10
—新人として—	池波正太郎	11
▶名画紹介シリーズ⑥◀		
枯山水	—龍安寺方丈庭園—	12

書の手が書に生きる	小松茂美	14
文化庁創設の頃	小川修三	16
	内山 正	17

報 告	・第二国立劇場(仮称)の設計競技について	18
	・昭和60年度日本語教育実態調査報告について	20

・第1回“国民文化祭”今秋開催!	22
・著作権法一部改正法, プログラム登録法成立!	23
・本の紹介「国民文化の創造」	23

文化庁ニュース

・昭和60年度民間芸術等振興費補助金の 交付状況について	24
・昭和61年度こども芸術劇場公演について	26
・昭和61年度青少年芸術劇場公演について	27
・昭和61年度中学校芸術鑑賞教室について	29

・文化庁行事報告及び予定	30
・国立劇場ニュース	31



書の下手が書に生きる 小松茂美

私の父は、広島と山口県下の山陽本線の駅を転々とつとめた国鉄職員であった。両親に早くに死別した父は、少年期から、国鉄を至上の職場と心得ていた。日々の勤務も真面目につとめていた。が、いかんせん字が下手であった。駅員というものは、日々、さまざまな記帳や筆記の仕事に追われる。そのつど、非常なコンプレックスにさいなまれた風であった。できれば、子供にだけは、この苦しみを味わせたくない、と思っていた。というわけで、私は、小学校に上る前から、習字を強制された。新聞紙を綴じた草紙に、稽古をさせられた。そのころの山陽本線は、一時間に一本の旅客列車が走るだけであった。列車が出ていけば、つぎが来るまで一息つける。夜の小関が、私に習字を強いる恰好の時間であった。駅の事務室に向いた私は、父の前で筆を執る。気に入らないと、煙管で、私の手首をたたく。筆がポロリと落ちる。痛さに涙があふれた。用捨なく、こんどは頭に雁首が飛ぶ。というわけで、私にとって、習字という科目は、いまわしいもの一つであった。が、それでも小学校に上がるころには、キレ

いな文字が書けるようになった。習字はクラス一と折紙がつけられ、展覧会などにも出品したりした。新聞社の褒賞もつけることが一再ではなかった。

ところが、小学校五年生の時であった。中学進学のための特訓をうけることになった。担任が変わった人であった。日ごろ活字のような、四角な文字を書いていた。つまり、下手な字であったのだ。机上では、左手に小さな三角定規をあやつりながら、横面を書く場合には、器用にすみやかに、定規を当てて、線を引く。まことに目まぐるしいかぎりであった。黒板に白墨で文字を書く場合には、大きな木製定規で、同じような操作をくりかえす。むろん、生徒にもそれを強いる。その人の言い分では、中学の入試に文字がキレイでないと採点に不利である、という。当然ながら、私にもそれをやれ、という。もともと、習字で右肩上りの文字を書く習慣がついていた私の文字は、その人には気に入らなかった。か

学に入ると、得意であったはずの書道は、あまりよい点が貰えなかった。しだいに、嫌な学科となった。五年間の中学生活では、とうとう下手になり下ってしまった。

☒

昭和十七年一月、私は国鉄の柳井駅にはたらくこととなった。もともと、三月が卒業式であった。それを二か月も繰り上げての就職は、当時、戦争末期の戦時特例という措置であった。柳井駅では、貨物掛というのが、私に与えられたポスト。来る日も来る日も、文字を書く生活であった。さまざまな帳票類の記帳。荷物の荷札。貨車の車票。筆墨は、貨物掛にとって必須のものであった。さきの事情で、下手になり下っていた私には、これも苦痛の種であった。貨車の行き先表示の車票には、大きな文字を書かねばならない。一枚書いたがダメ。つぎの一枚も、またそのつぎもうまく書けない。なん枚も破る私を、主任が見とがめる。当時、十七歳の私には、散々な職場であった。加えて、数学が不得意の私には、そろばんが扱えない。数字の計算を間違つて、当日の集計ができない。宿直の助役にはしかられる。というていたらくで、暗い思いの日々であった。

昭和二十年の春、戦争は末期に入っていた。私は、そのころ、広島市の鉄道管理部という役所に勤務していた。ある日、陸軍航空士官学校に入っていたイトコが、休暇で帰省して、師とする以外にはない。夢中で突っ走った三十二年であった。この間、書跡の研究一途に打ちこんだ。そして、文学博士・日本学士院賞・朝日賞と、身にあまる栄誉も、私の大きなささえとなった。去る三月末日で、定年を迎えて退職した。

ふつうならば、第二の人生を安穩に漕ぎ渡る、という選択もあった。が、私はさらにいどむことにした。私の打ち樹てた古筆学を、私一代に終わらせたくない。人文科学の新たな学問体系中に定着させるために、私力のすべてを投じて、古筆学研究所を開いた。これから推し進める仕事は、山ほどある。私の肩に、それらがずっしりとかかっている。が、私はひるまない。みずから選んだ道の道なのだから。

それにしても、下手で苦手の書を、みずから終生の仕事とする羽目になった私は、その不思議な因縁に、いま、改めて回顧の一瞬が、頭をよぎったことであった。

小松茂美（こまつ しげみ）
（前）東京国立博物館学芸部美術課長
現在、古筆学研究所長



一夜、私の所に泊った。寝床に腹ばいになりながら、四方山話はずんだ。その中の話：「軍隊という所は、文字をキレイに書けば、楽ができるよ」と私に告げた。内務班に使って貰えるのだという、虚弱な私にとって、体操も教練もいやな学科。教練が免除となれば、こんな有難いことはない。私は、その夜、習字の再開を決心した。当時、広島には、小川汀鶴という、聞こえた書家がいいた。イトコの教えにしたがって、汀鶴先生を訪ねた。市内の古寺の本堂の一隅に、その老先生は端座していた。八月一日に入管が決まっていた私は、三か月の速成で習字が可能かどうかを尋ねた。「それでガンスノー。あなたが、やってミンサランコトニワノ」と、ぶつぶつおっしゃる。つまり、私の精進次第だ、との託宣。それからの私は、必死で稽古にはげんだ。三日にあげず、半紙の束を、先生の前に出す。朱を入れながら、王羲之だ、道風、行成。貫之の名が、先生の口から出る。私は、それを無意識のうちに、聞き流した。なによりも字がうまくなればよい。ただそれだけなのである。目的は、簡単明瞭であったからだ。やがて、八月一日の当日がめぐって来た。朝鮮会寧の飛行場に赴くことになり、博多に集結した。そのころ、私は肺をやられていた。身体の悪い者は、という軍医の声に、手をあげた。加えて、当時、軍事輸送にかかわっていた私は、即日帰郷の命をうけた。満身の喜びを、表情に出すわけにはいかない。が、軍隊をの

がれた私は、爆発的な喜びを包むすべもなかった。博多の地をあとに、広島近郷の自宅にたどり着いたのは、八月五日の夜であった。翌朝六日、広島市の勤め先に出頭した。八時十五分、自分の机に向かったとたん、例の原子爆弾が炸裂した。爆心地から一七〇〇メートルの至近距離であった。怪我はなかったものの、翌朝から原因不明の高熱にうなされた。二か月あまりの高熱で、衰弱の極に達した。いわゆる原爆症であったのだ。その年の十二月のある日、初めて出勤した日の広島駅前で、池田龜鑑博士の「土佐日記」の研究書の一冊を手に入れたことが、私の人生を大きく変えることとなった。本の中に取める貫之や定家の写真図版が、小川汀鶴先生の講義をよみがえらせたのだ。やがて池田先生を頼つての上京。

そのころ、私は蔽島神社の「平家納経」に夢中になっていた。ふとしたはずみで、「平家納経」の三巻を見るチャンスに恵まれたことが、その動機であった。中学卒業の学歴しか持たない私に、「平家納経」の研究は、牛車に向かう螻蛄も同然であった。昭和二十八年四月、私は、みずから売りこんで押しかけた東京国立博物館に、浅野長武館長・石田茂作学芸部長の骨折りで、採用されることとなった。書跡室の勤務とはいっても、古い書が読めない。ましてや意味を理解することはできない。それからの日々は、悪戦苦闘の連続であった。頼るべき師はいない。みずから、われをわが

編集後記

○今月号では、「文化財の保存整備と活用」をテーマとして、歴史の道と風土記の丘をご紹介しました。ともに歴史的遺産を周囲の環境と一体的に保存活用しようとするものです。

○文化財を単に保存するだけではなく、私たちの生活の中に生かし、いかに活用を図っていくかが大切な課題といえるでしょう。上原氏の玉稿には、まさに「文化財の保存整備と活用」の実践例が息づいています。

○今月は、姫田、星野、池波、小松各先生にご寄稿いただきましたが、第一線で活躍する方の信念、生きざまが描かれており、改めて我が身を振り返らせられました。

○六月は文化庁創設の月です。先人のご苦労は小川、内山両先生の随想からしのべますが、私たちが初心にかえって文化行政にたずさわってまいる所存です。

広告の問合せ・申込み先

株式会社 きょうせい 営業課
TEL(0)3(3)268124(代表)

「文化庁月報」六月号

昭和61年6月25日印刷・発行
(通巻第二二二号)
編集 文化庁

〒100東京都千代田区塚元3丁目2番2号
発行所 株式会社 きょうせい

本社 半田東京都中央区銀座7丁目4番12号
営業所 千代田東京都新宿区西五軒町52番地

電話(0)3(2)268124(代表)
麻生口座 東京 九一六一番

印刷所 (株)行政学会印刷所

定価 一八〇円(送料四五円)
年間購読料 二一六〇円(送料共)